阪神タイガースと寿命

苫小牧市医師会
あびら追分クリニック
金本（かなもと）　一（はじめ）

今年もプロ野球が開幕しました。野球ファンにとって、今が一番楽しい時期です。皆さんの贔屓チームは開幕ダッシュに成功したでしょうか？

●

私は生まれも育ちも大阪です。地元ローカルテレビ局では試合開始から終了までタイガース戦が放送されています。翌朝ラジオをつければ、前日の試合内容が詳細に語られ、最後に男性局アナが六甲おろしを熱唱します。登校すると前日の試合結果によって担任の先生のご機嫌と宿題が変わります。こうした環境ですから大阪の男の子たちは自ずとトラキチ（熱狂的なタイガースファン）に育ちます。

子供の頃のタイガースはとても弱くダメトラと呼ばれていました。優勝は一生見られないと子供心に思っていました。このようなダメトラですが、これまでに４度のリーグ優勝を見ることができました。

●

１度目の優勝は1985年です。高校３年生の時でした。監督は、オールドファンからはショートでの華麗な守備から牛若丸の愛称でおなじみの吉田義男です。振り返りますと、４月には対巨人戦で槙原投手からバース、掛布、岡田のバックスクリーン３連発での勝利。５月には対広島戦で序盤７点差のビハインドゲームを逆転勝利するなど優勝を予感させるものがありました。リーグ優勝がかかった10月16日、神宮球場での対ヤクルト戦で勝ちか引き分けが優勝の条件でした。２点ビハインドで迎えた９回表にソロホームランと犠牲フライで追いついたのを見て何か神懸かっている今シーズンを象徴する試合だと感じたものです。

当時の日本シリーズは平日・デーゲームでした。授業中も試合の状況を知りたいのがトラキチです。今ならスマホで試合経過を逐一知ることができますが、その頃はその様な便利なツールはありません。小型携帯ラジオを胸ポケットに入れ、イヤホンを学生服の袖に通し、頬杖をついて授業を聞いている振りをして試合状況を把握していました。タイガースに点が入ると教室のあちらこちらで「よしっ！」「よっしゃ！」という声が上がりましたが、先生のお咎めはありませんでした。おおらかな昭和の時代でした。

２度目の優勝は2003年です。15年で14回のＢクラス、10回のリーグ最下位で「暗黒時代」と呼ばれる期間を挟んでのものでした。暗黒時代の原因は、前回優勝時にケンタッキーの店に設置してあるカーネル・サンダース像をバースに見立てて胴上げし、道頓堀川に投げ込んだ「カーネル・サンダースの呪い」と言われています。この年は星野仙一監督による「血の入れ替え」（大量のトレード、中日時代にも同様の手法で優勝に導く）を断行し、ダイナマイト打線を擁しての優勝でした。

３度目の優勝は2005年です。優勝の最大の要因は中継ぎ・抑え投手の活躍でした。岡田彰布監督が確立した勝利の方程式「JFK」ことジェフ・ウィリアムス（Ｊ）、藤川球児（Ｆ）、久保田智之（Ｋ）につないで勝利するスタイルです。６回までにリードしている場合の勝率は９割を超えていました。

余談ですが、この年の日本シリーズはロッテマリーンズに４タテを食らいました。４試合の総得点が「ロッテ33－４阪神」と完膚なきまでに叩きのめされました。これ以降、「334」に過敏になっています。コンビニでの支払いが334円ですとか、宿泊ホテルの部屋が334号室の時に動揺を隠しきれない人がいれば、それはタイガースファンです。

４度目の優勝は2023年です。第二次岡田政権です。前回の優勝から17シーズンでＡクラス12回、２位８回と好成績でしたが、優勝を意識すると選手が萎縮してしまい、優勝を幾度となく逃していました。そこで監督は優勝という言葉を封印し「アレ」という言葉で表しました。選手もマスコミもリーグ優勝をするまでは「アレ」という言葉を用いています。戦い方は守り勝つ野球で、当たり前のことを当たり前にやり、各選手に役割を意識させ、一丸となって勝利を掴み取る野球です。飛び抜けて大活躍した選手はいません。MVPは村上頌樹投手が選ばれましたが、大竹耕太郎投手、近本光司選手、大山悠輔選手が選ばれていたとしても異論はないでしょう。チームは投手、野手ともに層が厚く年齢構成も若手を中心にバランスが良いです。今年の連覇はもちろんですが、タイガースの黄金期到来さえも予感させます。

●

関西には都市伝説があります。「タイガースの優勝を４度見ると人は一生を終える」と。果たして５度目の優勝をこの目で見ることができるのでしょうか？